

「フェリクスの前での弁明 2」

2016年09月16日

使徒言行録 24 章 17 節～23 節 「さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。私が清めの式にあずかってから、神殿で供え物を献げているところを、人に見られたのですが、別に群衆もいませんし、騒動もありませんでした。ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」

フェリクスは、この道についてかなり詳しく知っていたので、「千人隊長リシアが下って来るのを待って、あなたたちの申し立てに対して判決を下すことにする」と言って裁判を延期した。そして、パウロを監禁するように、百人隊長に命じた。ただし、自由をある程度与え、友人たちが彼の世話をするのを妨げないようにさせた。

パウロは総督フェリクスの前で、エルサレム神殿の大祭司アナニアが同行させた弁護士テルティロの告発に対して、弁明した。告発されたような騒乱を神殿、会堂、町の中で起こしてはいない。告発の件で、彼らは総督に何の証拠も挙げることはできない。パウロは自分の信仰について、彼らが「分派」と呼んでいる道に従っているが、それは、先祖の神を信じ、律法に即して、預言書を信じることでであると語っている。更に、人の行いの良し悪しに関わりなく、復活する希望を神に対して抱いている。この希望は告発者たちと同じである。自分は神と人に対し恥じない良心を保つように努めてきたと確信を込めて語った。

それから、具体的なことを述べている。パウロはエルサレム教会の同胞に救援金を渡すため、また、神殿に供え物を献げるために、何年ぶりかに戻って来た。異邦の地から帰った者が身を清める式に与ってから、供え物を献げているところを人に見られた。そこでは、群衆もおらず、騒動もなかった。ただ、アジア州から来た数人のディアスポラのユダヤ人がいた。もし、自分を訴える理由があるとすれば、彼らが総督の所に出頭し、告発すべきである。彼らは、私が異教徒を神殿に招き入れ、神殿を汚したと騒いだからである。

さもなければ、ここで、私を告発している人たち自身が、最高法院で調べられた私にどんな不正を見つけたかを、今言うべきである。私は最高法院に立って、彼らに「死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ」と叫んだだけである。パウロは3点を弁明している。① 騒動を引き起こすようなことはしていない。② 異邦人を神殿に入れて、汚したと騒ぎを起こしたディアスポラのユダヤ人たちが告発すべきである。③ 最高法院では復活に関して述べただけで、不正があるなら、彼らが今ここで、言うべきである。エルサレムから来た告発者たちは返す言葉がなかったであろう。

フェリクスは「この道」、主イエスを信じる群れに関してかなり詳しく知っていたという。エルサレム教会の働き、パウロたちの異邦人宣教は耳に入っていたのであろう。彼は、当初から関わった千人隊長リシアが下って来るのを待って、ユダヤ人たちの告訴に対する判決を下すと言って、裁判を終えた。判決は延期された訳である。そして、パウロを監禁するように百人隊長に命じた。その監禁は友人たちから世話を受けるのを妨げない自由を認めるものであった。パウロの監禁は続くことになった。